



漢詩を味わう

第145回

はなんのしゅうちゅう  
巴南舟中 岑参

渡口欲黄昏 渡口黄昏ならんと欲し  
婦人争渡喧 婦人渡を争って喧すし  
近鐘清野寺 近鐘野寺に清く  
遠火点江村 遠火江村に点ず  
見雁思郷信 雁を見て郷信を思い  
聞猿積淚痕 猿を聞いて涙痕を積む  
孤舟萬里秋 孤舟萬里の秋  
秋月不堪論 秋月論ずるに堪えず

渡し場に夕暮れが近づき

舟に乗って帰りを急ぐ人々が先を争ってさわがしい。

野中の寺から、清らかな鐘の音が間近にきこえ、

川辺の村にはるかに灯火が点々とともる。

空を渡る雁の姿をみれば故郷からの便りが思われ、

猿の声を聞けば、涙の痕が積み重なる。

涙の痕が乾く間もないほどだ。

たったひとりのこの舟旅も、見渡す限りの秋景色の中。

秋の月を仰いでも、とかく品評するような気持ちにはとてもなれない。

《巴南》巴は今の四川省の地方。その南の地方一帯。

《渡口》渡船場。

《不堪論》言うにしのびない。

岑参（七一五～七七〇）は、次頁で取り上げた顔真卿と同時代の進士です。節度使の幕僚として二度にわたり西域に赴き、辺塞詩人として名を馳せました。顔真卿が監察御史として河隴に赴くに際し、友人として送別の席で詠んだ詩「胡笳の歌、顔真卿の使して河隴に赴くを送る」は岑参の代表的な詩です。その生涯は顔真卿と同じように安史の乱に翻弄されました。この詩は、岑参が嘉州（四川省眉山県）の勅使を辞し、長安へ向かう旅の途中の作と考えられています。詩形は五言律詩ですが、二句四聯から構成されます。

第一聯は黄昏時の船着場で、帰りを急ぐ先を争う人々の喧騒の描写から始まります。第二聯では自分の乗った舟に澄んだ寺の鐘の音が響き渡り、漁火でしょうか？遠くに漁村に火影が見え始めます。

つづく第三聯は空を渡る雁と、岸辺で鳴く猿を描きます。雁の足につけられた手紙のことを雁信や雁書と呼び、雁は故郷に手紙を運ぶ使者です。猿の鳴き声はこの地方の川旅の景物として悲愁の思いを抱かせます。古楽府に「巴東の山峡、巫峡長し、猿啼くこと三声にして涙裳を沾す」を踏まえていると思われます。雁や猿の鳴き声は郷愁をそそり、異郷の旅枕に幾度涙したことであろうかと、悲哀の情を述べます。

そして最後の第四聯で自身の感慨を述べています。たった一人での舟旅は見渡す限り秋景色です。「万里」には、故郷からの隔たりと、今まで自分が歩んできた万里の旅の意味合いがあります。今の自分の心境では、秋の美しい月をめぐるような心の余裕はとてないと結んでいます。

この作品は岑参晩年の作と言われます。嘉州勅使を辞し、長安に向かう舟上で詠んだとも言われていますが、岑参はその途中の正月、成都の旅舎で病没しています。この年（七七〇年・大暦五年）は杜甫の没年でもありません。

参考文献…三体詩（朝日新聞社）・唐詩鑑賞辞典（東京堂出版）・漢詩の事典（大修館書店）

川かは過すかにして楓林もみぢ散まに 山深くして竹港たけこう幽ゆうかなり 疎煙そえん去る鳥を沈しずめ 落日帰る牛を送る

川過かにして楓林散に  
山深くして竹港幽かなり  
疎煙去る鳥を沈め  
落日帰る牛を送る

元好問詩  
山居雜詩其四

《大意》川ははるかに流れゆき、ところどころに楓の林が散在している。山は深く、竹に囲まれた船着き場も密やか。うすもやは

飛び去る鳥の姿をかくし、夕日は帰りくる牛を見送る。(元好問詩・山居雜詩其四)

往事飛鴻おうじひこうの外ほか 浮生蝶夢ふせいちょうむの中うち

往事飛鴻外  
浮生蝶夢中

顧清

往事飛鴻外  
浮生蝶夢中

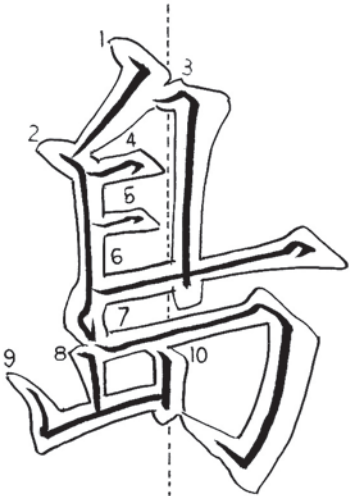
顧清

《大意》過ぎ去った昔の事は飛鴻の外で跡もない。このはかなき人生は蝶に化した一夢の中にある。※蝶夢は莊子の故事。(顧清)


読み  
主人孤島の中  
(故郷の家のあるじである君は孤島の中に住むことになるのだ)

主人  
孤島  
中人  
孤

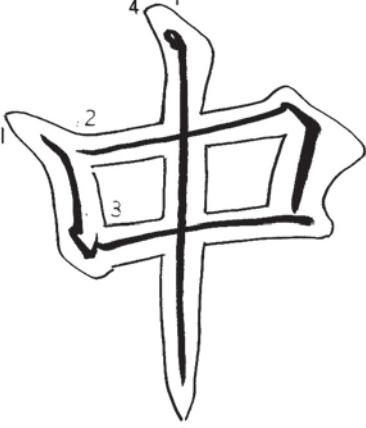
佐藤象雲書



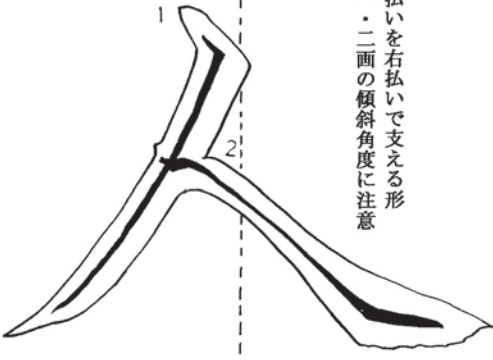
島は水で囲まれた陸地で、鳥が集まることが多いことから島の略体と山の会意文字となる。山の位置取りが難しい。



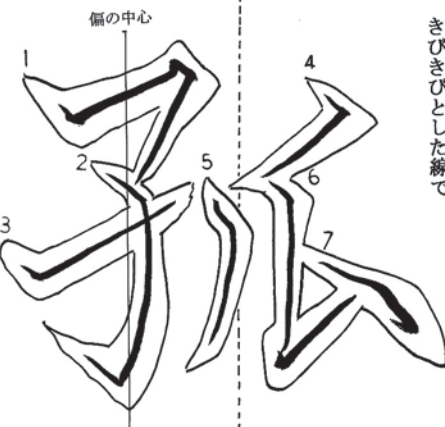
中心縦画を強く  
仰  
平  
俯



横広、肉太に



左払いを右払いで支える形  
第一・二画の傾斜角度に注意



書写体で旁は活字体と異なる  
きびきびとした線で

一般部規定課題出品について  
 ・規定課題は段級の区別なく、前頁掲載の五言句となります。  
 ・初段以下の方に限り、前半二文字または後半三文字でも構いません。  
 ・規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

連月課題

王維詩

「送秘書官晁監日本国」

積水不可極

積水極む可からず

安知滄海東

安んぞ滄海の東を知らん

九州何處遠

九州何れの処か遠き

萬里若乘空

萬里空に乗ずるが若し

向國惟看日

国に向つて惟だ日を見る

歸帆但信風

帰帆但だ風に信す

鰲身映天黑

鰲身天に映じて黒く

魚眼射波紅

魚眼波を射て紅なり

郷樹扶桑外

郷樹扶桑の外

主人孤島中

主人孤島の中

別離方異域

別離方異域なりて

音信若爲通

音信若為か通せん

草書

行書

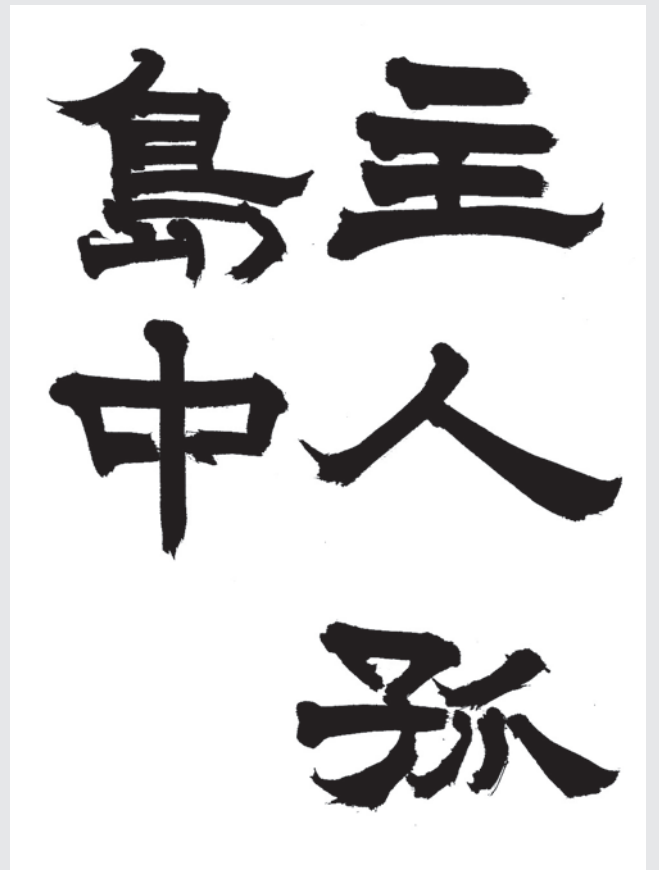
※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。



次号課題

隸書



別離<sup>まさ</sup>方に異域

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

細字部昇格試験課題実施要項

- ・左記の三体千字文の一節を所定用紙に揮毫
- ・欄外に支部・段級・氏名を明記して下さい
- ・〆切九月二日(木)・受験料三,〇〇〇円(税込)

音

シヨキチユウヨウ  
ロウケンキンチヨク

略解

中庸をこいねがい望んでこれを得る。  
へりくだりゆずり、言行を正しく慎む。



※今月の月例出品はお休みです。

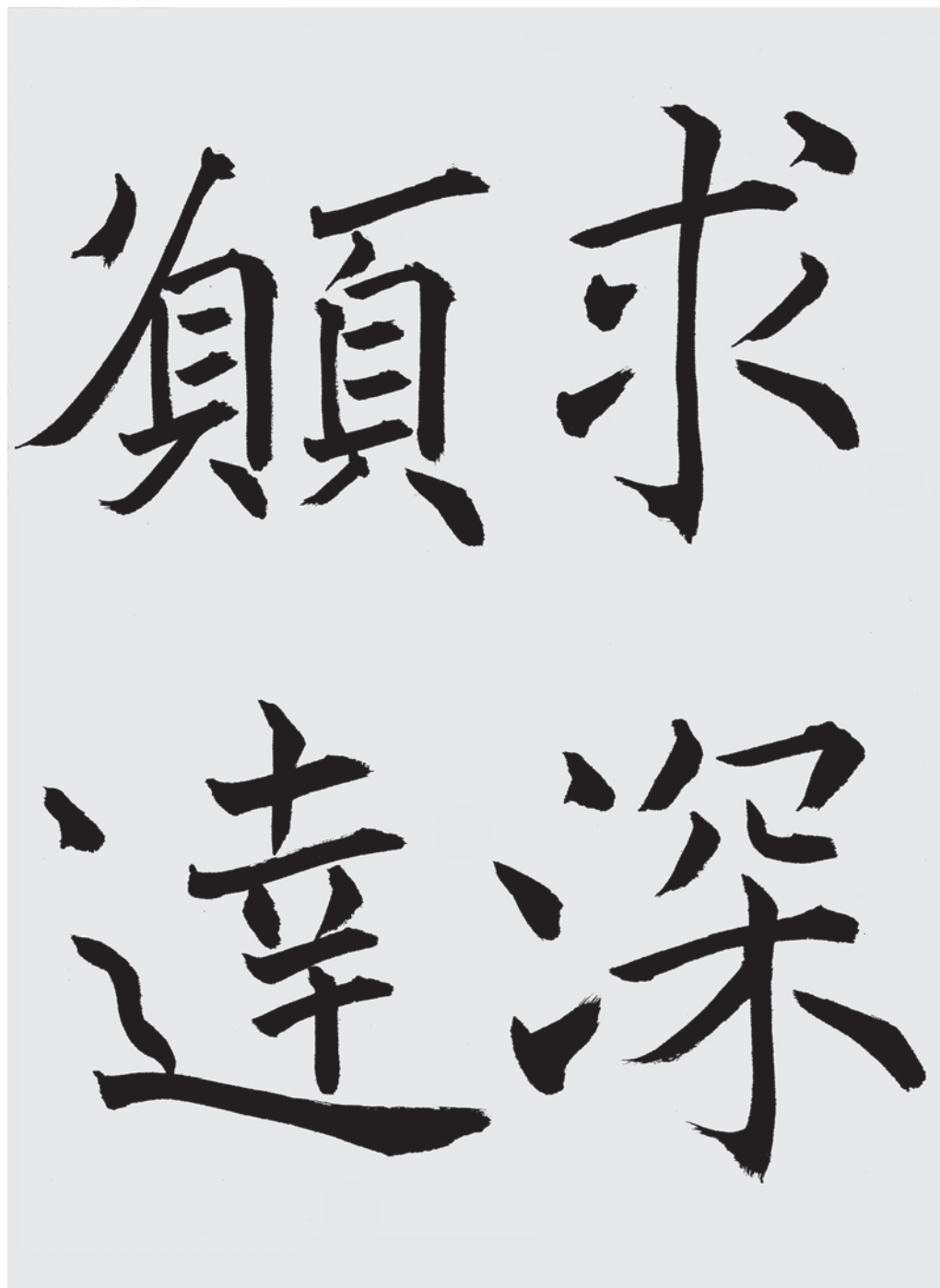
佐藤象雲書

※一級以下の方の試験課題です。実施要項は四十二頁をご覧ください。

支部	順位	氏名
非常の時		
人危うきを冒して人を護るは貴いかな		

高村光太郎の詩より

和泉溪石 先生書



深さを求めて達せんことを願えり

象雲臨

■ 褚遂良・雁塔聖教序

(初唐・西暦六五三年)の臨書

(61)

「求深願達」

楷書の頂点といわれる初唐の三大家は各々個性的な書風を築き上げました。三大家の書いた点だけを抽出して眺めてみると、楷書で使う点だけでも多くの種類があることに驚きます。点は書の根元です。線は点の連続とも言われます。今月の「求深願達」は多くの点があります。入筆の角度、強さ、大きさ、長さなど様々な要素の違いによってその形も違ってきます。点の打ち方一つで字の表情が異なってきます。古典から形体とともに線質を学ぶ意義はここにあります。

古人は様々な点に名称を付けています。「側点」「梅核」「杏仁」「垂珠」「柳葉」「龟头」「啄点」など一つ一つの点の形から名付けられたものがあり、また「其脚点」や「烈火点」などセットになって打つ点の変化を名付けたものもあります。ここでは個々の点について解説する紙面がありませんが、今月はとくに点の表情の違いを意識しながら臨書してください。





微を窮め妙を測る……

象雲臨

■孫過庭・書譜（初唐・西暦六八七年）の臨書

(42)

【窮微測妙】

書譜は、唐時代の草書の名品であるとともに、六朝以来の書の伝統を踏まえた書論として重要な古典です。作者の孫過庭に関しては官位も低く正史に記載がなく、その人物像も伝っていませんが、書譜の内容から相当な能書家であると同時に優れた書史研究家だったように思われます。

今月の「微を窮め妙を測る」は、「書において珍しいもの、見事なものを尚ぶ人々は、さまざまな形態を賞翫し、精微に考察し妙味を検討する人々は、書の変幻の奥にものごとの推移の真理をつかもうとする。」というくだりの一節です。さらに「著述家はその文書の内容を参考にし、評論家は、そこから美の真髄をくみ取る。」とし、「書とは、このように本来いろいろな学問真理の帰する所であって、賢人達人たがともに善となすものになるものである。」と結んでいます。

古の中国では、書がものごとの道理や美の真髄を探る手掛かりとして、如何に重要な芸術学問であったかが解ります。